

#### 4 レタスベと病が急増—発生経過と実態—

##### ねらいと成果

淡路地域におけるレタスベと病の発生はこれまで殆ど問題にならなかったが、2002年から診断の持ち込みが目立ち始め、2004年、2005年と多発生した。本病は、下葉の黄化と葉裏での汚白色のかびの発生が特徴であり、ひどくなると結球葉にまで病斑やかびを生じ、腐敗症状に至ることもある。防除対策を検討するために、発生実態を調査した結果、育苗期、本圃とも発生が継続して増加傾向にあること、栽培条件によって発生量の差があることが分かった。

##### 内 容

###### 1 ベと病の発生経過

ベと病の発生を最初に確認したのは2002年3月の持ち込み診断による。その年は旧南淡町の1件だけで、2003年3月には旧南淡町、西淡町の2件のほか、数筆の本圃で発生が認められるようになった。

###### (1) 苗での多発生

2003年12月にはハウス育苗（春レタス用）で発生が認められ、2004年1月下旬には育苗ハウスの発生圃場率は66.7%と多発生した(表1)。2004年12月～2005年1月にかけても診断件数や発生情報は多く、前年に続いて多発傾向にあった。

###### (2) 本圃での多発生

2004年2月の本圃の発生圃場率は、未結球ほ場（定植12月）の23.5%に対し、既結球圃場（定植10～11月）では0%であった。過去に本圃での発生は全く問題にならなかったこと、11月以前の育苗では

発病が認められなかったことから、この年の本圃での発生は土壌からの伝染よりも、定植に用いた苗の発病の有無によるものとみられる（表1）。

一方、2005年では1月下旬の結球期の圃場で、旧三原町、西淡町を中心に発生圃場率30.6%と多発生し、しかも発生圃場の半分は発病株率が75%以上の甚発生であった（表2）。発生原因は前年とは異なり、発病苗から本圃へ持ち込まれたベと病菌による土壌伝染が主体と思われる。

##### 2 栽培条件と発生の特徴

育苗条件では、ハウス育苗では多発生したが、トンネル育苗では発生が確認されなかった（表1）。また、本圃の畝マルチと発病との関係では、無マルチほ場では78.6%のほ場で発生が認められたのに対し、マルチ栽培ほ場では発生が皆無であった(表2)。

レタスベと病は発病した残さに卵胞子を作って土壌中に生存し、翌年への伝染源となるため、発生は定着する恐れが強い。育苗中および本圃での発生の早期発見とともに予防を重点に置いた総合的な防除対策を取る必要がある。

##### 今後の方針

- 1 発生環境条件の解明
- 2 有効薬剤の効果的使用法の確立
- 3 登録薬剤の早期拡大
- 4 育苗ハウス内の湿度低減技術
- 5 畝マルチの発病抑制効果の検討

西口真嗣（淡路農技・農業部）

表1 レタスベと病の発生状況（2004年）

地 域	1月(育苗)		2月(本圃)	
	ハウス	トンネル	未結球	既結球
三原町	4/4	—	2/4	0/3
西淡町	3/3	0/2	1/6	0/2
南淡町	2/5	—	1/7	—
合 計	9/12	0/2	4/17	0/5
発生圃場率(%)	75	0	23.5	0

表中の数値は、発生圃場数/調査圃場数を示す

表2 レタスベと病の発生状況（2005年1月・本圃）

地 域 調 査 圃 場 項 目	調 査 圃 場 数	発生程度別圃場数				
		甚	多	中	少	無
三原町	24	10	3	0	0	11
西淡町	30	1	2	2	4	21
南淡町	18	0	0	0	0	18
マルチあり	44	0	0	0	0	44
マルチなし	28	11	5	2	4	6
合 計	72	11	5	2	4	50
発生圃場率(%)		15.3	6.9	2.8	5.6	69.4

甚：発病株率75%以上，多：50～74%，中：25～49%，少：1～24%，無：0%